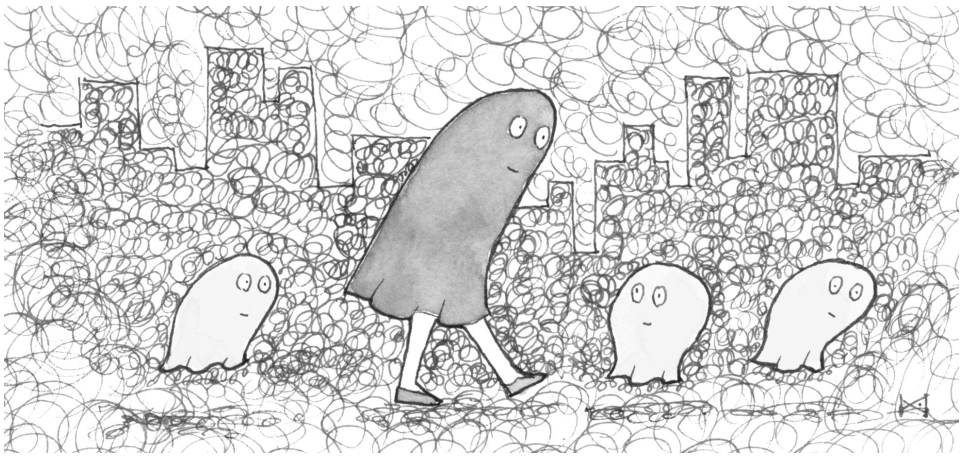
Me and My Ghosts
わたしとわたしのゴーストたち

伊津野果地

　かつてわたしには３人のゴーストがいた。

　はじめてそれに会った時のことは今でもよくおぼえている。
自分の指と、その指が触れているものとの境界がまだ曖昧だったころのある日。のたぶん夕方。ノースリーブのワンピースを着ていたので、おそらく夏。わたしは茶色い日差しが入るリビングの床にすわりこんで、絵本がわりにゴーギャンの画集を繰っていた。（開いていたのは『わたしたちはどこからきてどこへ行くのか』のページだった。が、これはのちに捏造された記憶かもしれない。）ふと気配を感じてソファーのある方へ目をむけると、板張りの床から音もなくじわりと、白いような黄色いような青いような赤いようななにかが、ゆっくりと現れて宙にに浮かんで私を見た、ような気がした。目があると思われる場所には何もなく、その部分だけ文字通り何もないのでちいさな洞が２つならんでいた。それはしばらく私のまわりをふわふわと周回していたが、私が「なにかさがしてるの？」と聞いたとたん、ぱふんっ、と小さな音をたててに消えた。
　以来それは時々私の前にあらわれるようになった。ある時は登校中に現れて一緒に学校へ行ったし、旅行にもついてきた。ふと目を覚ますとまくらもとにじっと浮かんでいることもあったし、湯船につかったりすることもあった。わたしは小さなふわふわとした半透明のそれを「ふわふわ」と呼ぶことにした。「ふわふわ」はいつも急に、ぱふんっ、と消えた。いなくなるタイミングはまったく予期できなかったが、私がうっかり何かを話しかけるとかならず、ぱふんっ、と消えた。

　何年かたったある日、気がつくと「ふわふわ」は2 つに増えていた。そのころの私は、自分の指と、その指が触れているものとの区別がつくようになってきた頃で、次第にはっきりしていく自分の形や、同時にはっきりしていく自分を取り巻く世界の姿を確認するのに夢中だった。そのせいかはわからないが相変わらず輪郭のはっきりしない「ふわふわ」が増えても私はまったく気にしなかった。そして、まったく気にしないでいたら、数日後にそれは３つに増えていた。
　彼らはとてもよく似ていたが、私にはなんとなく区別がついていたように思う。同じ頃「ふわふわ」という呼び名はどうも子供っぽいような気がしてきたので、彼らの名前を「ゴースト」に改めることにした。がぜんかっこいい気がした。私のゴーストたち。
　私のゴーストたちは、時には連れだって、時にはそれぞれ1 人づつ、しばらくの間は以前と同じくらいの頻度で、同じくらい唐突に現れ、消えた。彼らはたいていは私の後をふわふわとついてくるだけだったが、ときには彼らの旅に私を連れて行ってくれることもあった。ゴーストたちの1 人に跨り、あるいは頭からすっぽりとかぶり、私は彼らと光速の旅にでた。私はそこで色々なものを見、聞き、感じた。はずなのだけど、しばらくたつと、なにか混ざり合った美しい色彩の塊、のようなものの記憶がうっすらと残っているだけだった。いろいろはっきりさせたい当時の私は当然自分が見てきたものについてゴーストたちにたずねたはずだが、おそらく、彼らはいつものように返事をしないまま、ぱふんっと音を立てて消えたのであっただろう。



　さらに時が過ぎ、自分の指とそれが触れているものとの境界が過剰に明確になり、自分のことやそれをとりまく世界のことがわかりきったものに（なったようなつもりに）なっていくにつれ、私のゴーストたちと会う回数は減っていった。それでもたまに海でいきなり現れたり、深夜にベッドで本を読んでいて、ふと気づくと隣に浮かんでいたりしたが、昔のように彼らの旅に同行することはすっかりなくなった。
　最後に彼らに会ったのは、２０代前半のいつかのことだったと思う。何年かぶりに現れた私のゴーストたちは、あいわかわらずの感じで私のまわりをふわふわと舞った。私は彼らのことをだいぶ忘れていたくせにとても嬉しかった。その嬉しさがあまってなのかどうなのか、今まで不躾だと思って一度もしたことのなかった質問をしてみたくなった。
「あなたたちは一体なに？」
これまで通りであれば私のゴーストたちは何も答えず、ただ、ぱふんっ、と消えてしまうはずだったが、この日は少し様子が違っていた。

「ぼくが、かつての君のゴーストで。」
「ぼくが、今の君のゴーストで。」
「ぼくが、これからの君のゴーストです。」

　彼らは小さいがはっきりした声（声というのが正しいかどうかはわからない）で私の問いに答え、そして私が「なるほど！」といいかける前に、パチンッ、と音をたてて消えた。彼らが質問に答えたことにももちろんおどろいたが、その答えの中身と、それに自分が「なるほど！」と思ったことにもおどろいた。だがその時の私には確かに「なるほど！」な感覚があったのだ。そういわれてみればかつてゴーストたちと旅先で見た景色は、かつて生きて死んだ私が見た光景であったかもしれず、今生きていない私が見る光景であったかもしれず、はるか未来に死んでいるだろう私がみる光景であったかもしれないように思えた。
　消えるときの音の違いにはやはり何か意味があったようで、それを最後にゴーストたちは私の前に姿をあらわしていない。

　それからずいぶん長い時間がたち、私は人生半ばにして、暗い森ではなく、夜明け前程度のうすくらがりのベランダで、そこそこ迷子になっている。いたるところに何度も引き直された境界線は、むしろ私と世界の輪郭をぼかし、しばしば疲弊した境界を引き裂いているみたいだ。こうしてふたたびものごとの境目が（初めてゴーストに出会ったころとは別の意味で）曖昧になってきた今、私は少し怯え、少しわくわくしながら、そろそろあのゴーストたちが姿をあらわすのではないかとひそかに思っている。今度は、できるだけがまんして話かけないようにしようと思う。